

てかてか頭の話

小川未明

青空文庫

ある田舎に、おじいさんの理髪店がありました。おじいさんは、もうだいぶ年をとつていまして、脊が曲がつていました。いいおじいさんなものですから、みんなに、おじいさん、おじいさんと慕われていました。

ちようど、夏の昼過ぎのことです。お客が一人もなかったので、おじいさんは、居眠りをしていました。

家の外には、きらきらとして暑そうに日の光がさしていました。往來の土は乾ききつて、石の頭までが白くなつていました。あまりあついとみえて、犬一ぴき通つていませんでした。よく遊びにくる近所の子供らも、みんな昼寝をしているとみえて姿を見せません。ただせみが、あちらの森の方で鳴いているのが聞こえてきたばかりでした。

白髪頭のおじいさんは、いい気持ちで、こつくり、こつくりと腰かけて居眠りをしながら夢を見ていました。

「おじいさん、僕にとんぼを捕つておくれ。」と、隣のわんぱく坊やがねだっているのです。

「私は、目が悪くて、とんぼのほうが、よほどりこうだから、それだけはだめだ。」と、

おじいさんはいつていました。

「よう、あすこにいるおはぐるとんぼを捕つておくれ。捕つてくれないとぶつよ。」と、わんぱく坊やがいつています。

おじいさんは、「こいつめが。」といつて、坊やを追いかけようとする目めがさめました。ちやうどそのとき、そこへ脊の高い若者が入つてきました。

「おいでなさい。」と、おじいさんは、目をこすりながら立ち上がりました。そして、曲がつた脊をのして、いすに腰をかけて、鏡に向かつている若者の頭髪を刈ろうといひました。

おじいさんは、眼鏡をかけて、はさみをチヨキチヨキと鳴らしながら、くしをもつて、若者の頭髪にくし目を入れてみて驚きました。その頭髪は、ごみや砂で汚れて、もう幾年も手を入れたことのないような頭髪でありました。

「おまえさんは、どこからきなさつた。」と、おじいさんは、若者に聞きました。すると、若者は、日に焼けた、真っ黒な顔を向けて、おじいさんにいひました。

「俺かい、俺は、山ん中から出てきた。町なんかめつたに出たことはねえだ。俺、この間、途中でたいへんにきれいな男の人を見た。その人の頭は、ぴかぴかと岩からわき出る清

水みずのように光ひかっていただ。俺おれ、どうして、あんなに人間にんげんの頭あたまちゆうものが、ぴかぴか光ひかるだかと、いろいろの人ひとに聞きいたら、中なかで、それは、鬢びんつ付け油あぶらというものを塗ぬるからだとお教おそわった。俺おれ、一生しやうに一度いどでいいから、あんなぴかぴかした頭あたまになってみたいと思おもつてきただ。途とちゆう中で、いちばん上じやうとう等な鬢びんつ付け油あぶらを高い金かね出して買かつてきたから、これを俺おれの頭あたまにみな塗ぬってもらうべえ。」と、その若わかもの者はいいました。

「それで、おまえさんはやつてきなすつたか。」と、人ひとのいいおじいさんは、笑わらつて聞ききました。

「ああ、それできた。ここに一本ほんあるんだが、これじやたりないかえ。」と、若わかもの者は、買かつてきた一本ほんの鬢びんつ付け油あぶらを懐なつかの中から出だしました。

おじいさんは、それを受け取うとつて、

「こりやほんのちよつとつけりやいいのだ。なんでこれ一本ほんなんかいあるものか。」といいました。

すると、若わかもの者は、心配しんぱいそんな顔かおつきをして、おじいさんを見みました。

「どうかそれ一本ほんみんな、俺おれの頭あたまにつけてくんせえ。俺おれ、せつかく買かつてきただ。ちよつくらつけて光ひかるものなら、みんなつけたら、一生しやたま頭あたまがぴかぴか光ひかっているべえ。後ご生しょう

だから、どうかみんなつけてくんなせえ。」と、頼むようにいいました。

おじいさんは、髪を刈ってしまつてから、堅い鬢付け油の端を欠いて、男の頭に塗つて、びかぴかとなりましたから、

「さあ、これでたくさんだ。こんなに頭がびかぴかとなつた。この残りは、また今度つけるがいい。」といつて、鬢付け油を若者に渡そうとすると、この脊の高い若者は、おいおいと声をあげて泣き出しました。

「どうか、後生だから、みんなおれの頭に塗つてくんなさろ。」と、泣きながらいったのです。

おじいさんは、しかたがなく、指の頭で、堅い鬢付け油を欠いては、若者の頭に塗りました。額から汗が流れて、指頭が痛くなりました。おじいさんは、指頭に力を入れて、顔をしかめながら、

「このばか溶ける、このばか溶ける。」といいながら、やつとこのことで、鬢付け油一本をついに若者の頭に塗つてしまいました。

若者は満足して、この理髪店から外に出てゆきました。

若者は、やがて往來に出ると、頭から、とめどもなくだらだらと油が溶けてきまし

た。初めのうちには、それでも元氣よく歩いていましたが、しまいには目となく、耳となく、鼻となく油が流れこんできて、目口も開かなくなつたので、若者は、道の上のひととこゝろにじつと動かずに立ち止まつてしまいました。

「このばか溶ける、このばか溶ける。」と、せみの鳴き声がそういつているように聞こえるかと思うと、だんだん男の体が頭から溶けはじめてきたのです。けれど、ちようどだれも路を通るものがなかつたので、それを見たものがありませぬ。真昼の太陽の下で、男はついに溶けてしまつたのです。そして、そこにただ一つ黒い石が残つたばかりでありました。

その後、用事があつて床屋のおじいさんがつえをついてそこを通りかかりましたときに、真つ黒な石を見つけて拾ひ上げました。

「ああ、りつぱな油石だ。」といつて、おじいさんは、家に持つて帰るために、たもとの中に入れてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「童話」

1920（大正9）年10月

※表題は底本では、「てかてか頭《あたま》の話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「ぴかぴか頭の話」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

てかてか頭の話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>